教職員と市民でつくる人権教育情報紙
はじけるこころ
Vol.52
まいにち学校　まいにち街の中　こどもの笑顔につなげる

編集・箕面市人権教育推進会議
発行・箕面市教育委員会人権施策室
TEL：072－724－6921
E-mail：edujinken@maple.city.minoh.lg.jp

令和４年（２０２２年）２月

この情報紙は、保育所・幼稚園・小中学校の保護者をはじめ、広く市民のみなさんに、身近な人権教育の話題を知っていただくため、市民参加方式で編集したものです。

　ご家庭で子どもさんと、あるいはご近所や職場のかたと、こうした話題にふれて、語り合っていただければと思います。

あすチャレ！スクール
～パラアスリートから学ぶ　多様性を認め合う大切さ～

◇講師　加藤　正　さん

・パラリンピック夏冬あわせて５回出場

・長野冬季パラリンピック「アイススレッジスピードレース」銀メダル２個、銅メダル１個獲得

※小学２年生の時、左脚大腿部に骨肉腫が判明し、切断。

＊

令和３年11月16日（火）から19日（金）、箕面小、西小、二中、四中、五中の５校においてパラアスリートから学ぶパラスポーツ体験型出前授業「あすチャレ！スクール」が実施されました。「あすチャレ！スクール」とは、日本財団パラリンピックサポートセンターが主催する、全国の小学校・中学校・高等学校等を対象に行うプログラムです。子どもたちがパラアスリートとともにスポーツを体験し、リアルな声を聴くことで、

＊他者のことを自分事として考える心

＊障がいとは何か？

＊可能性に挑戦する勇気

＊「夢」や「目標」を持つ力

について考え、学びます。

もくじ

あすチャレ！スクール　～パラアスリートから学ぶ　多様性を認め合う大切さ～　1
北小学校　「人権教室」　～いじめについて考えよう～　3
第三中学校　連携行事　～せいなん幼稚園との交流～　4
第４回　イキイキさわやかに学ぶ会　発達障がいのある子どもとのかかわり　～子どもと話そう　子どもに聴こう～　5
箕面市人権教育推進会議　「萱野東小学校の実践　～自立・自律・繋がる　をめざして～」　6
学校図書館司書コーナー　「心を育む、図書の時間の読み語り」　7
編集後記　８

11月19日（金）には、箕面小学校で4年生を対象に実施されました。

授業は約90分間で、「デモンストレーション」「パラスポーツ体験」「講話」の三部構成で行われました。

「デモンストレーション」では、加藤さんが児童たちの目の前で、実際に競技用車いすに乗り、すばやいドリブルや車いすからの見事なシュートを披露しました。児童たちは、パラアスリートのハイレベルなプレーを生で見て、「すごい！」と驚きの声を上げていました。

次の「パラスポーツ体験」では、代表の児童20名が、実際に競技用車いすに乗り、5対5の車いすバスケットボールのミニゲームを2試合に分けて行いました。児童たちは、慣れない車いすの操作に苦戦しながらも、周りの児童たちからの声援や、加藤さんからのアドバイスを受けながら、一生懸命プレーしていました。

そして「講話」では、加藤さんがパラスポーツを通じて得た経験を交えながら、障がいについてや、夢や目標を持つことの大切さについて話をされました。講話の最後に、加藤さんは「失敗することがあるかもしれませんが、色々なことにチャレンジしてください。チャレンジをすることで、きっと、自分の才能や武器を見つけることができます」と児童たちに語りかけました。

車いすバスケットボールを体験した児童は「車いすの操作が難しかったけど、楽しく試合をすることができました」と話しました。また、プログラム終了後の児童の感想では、「あきらめずに一生懸命にやっていると、こんなにすごいんだ（加藤さんのプレイを見て）」「障がいのある人も障がいのない人もコミュニケーションが大事」「はじめからむりだなぁと言わずに一度挑戦してからむりだったか、できたかを決めるように試すことが大切」とありました。

第四中学校では1年生を対象に実施されました。さすが、中学生です。車いす操作を身につけるのも早く、迫力ある試合が展開されました。生徒からは「最初は車いすバスケ?と思いながらプレイしたんですが、どんどんゴールが決まって、いつものバスケよりもおもしろかったです。本当にありがとうございました」「大事なのは努力すること、チャレンジすることだと思いました。いつかスポーツが得意な人、勉強ができる人、障がいのある人というように、その人の持ち味として受け入れられたらいいな、と思いました」など、感想が寄せられました。

☆・・☆・・☆・・☆・・☆・・☆・・☆・・☆

「あすチャレ！スクール」　体験レポート

この度、箕面小学校4年生のあすチャレ！（車いすバスケットボール）に同行しました。街中で見かける車いすとは違った形の競技用車いすに興味津々の児童たちでした。また、はじめに加藤選手から、車輪が斜めにつき、自動車のバンパーの役割をするガードがついている等の説明を聞き、これから行われる体験にどんなタフさが求められているのだろうとドキドキしている様子でした。

実際にプレーしてみると真っ直ぐに前進するだけでも一苦労だったのが、次第にパスを出したり、どの位置からシュートすればよいのかを考えてチャレンジするようになってきました。体験した児童から「テレビでパラリンピックを観ていたら簡単そうだったのに、やってみたら難しかった！」「操作が思い通りにはいかなかったけど、とても楽しかった！」と感想があり、日常使いとは違う「競技」としての車いすとの出会いと、自分がその（相手の）立場になったからこそ感じられる言葉がありました。

児童たちの体験後に私自身も挑戦しましたが

（対　先生チームで完全なアウェーでした！）、車いすの軽さに驚いたのと、ボールを持つ・車いすで進む・ドリブルする・ボールを投げる（パス、シュート）を同時進行させることが簡単にできませんでした。わずかな時間でしたが体験することにより、コート全体をスピーディーに移動し、時にはぶつかり合いながらプレーする選手たちを会場で観てみたいと思いました。

今回のあすチャレ！を通して競技をより身近に感じ、今後も応援・観戦したくなるきっかけになりました。冬季パラリンピックが開催されるのが今から楽しみです。

（市民委員　越山　史）

☆・・☆・・☆・・☆・・☆・・☆・・☆・・☆

北小学校　「人権教室」
～いじめについて考えよう～

11月15日（月）、北小学校3年生と4年生で人権について考える「人権教室」が実施されました。

「人権教室」とは、箕面地区人権擁護委員の皆さんが実施するプログラムで、ＤＶＤ教材を鑑賞しながら、人権について考えることにより、命を大切にする気持ちや、他人を思いやる心を育みます。

今回は、『プレゼント』というＤＶＤ教材で、「いじめ」をテーマに、登場人物それぞれの気持ちを考えることを通して、他人への思いやりやいたわりの心といった人権を尊重することについて学びました。

授業は45分間で、「ＤＶＤ鑑賞　前半」「話し合い」「ＤＶＤ鑑賞　後半」「ワークシートへの記入」の構成で行われました。

教材『プレゼント』は、友だちの誕生日会に招待された主人公が、選んだプレゼントが原因でクラスメイトたちから仲間はずれにされますが、やがてそれぞれの気持ちに気づき、仲直りに向かう物語です。誕生日会やプレゼントといった身近な内容に、子どもたちは、真剣な表情で物語を鑑賞していました。

「話し合い」「ワークシートへの記入」では、①いじめられている子の気持ち　②いじめている子の気持ち　③周りで見ている子の気持ち　④いじめをなくすためにはどうしたらよいか、について考え発表しました。子どもたちからは、「どうしたら解決するか」について、「自分で、イヤだとしっかり言う」「自分から言えないかもしれないから、周りにいる子が、やめてあげて、と言う」「安心できるお父さんやお母さんにいじめのことを話す」という考えが発表されました。

授業後の振り返りでは、「いじめはやっぱりとてもしんどいし、かなしいし、つらいです」「いじめについて知ることができてうれしいです。なぜなら、2年生の時、少しのいじめをしちゃったからです。この物語を見て、自分が傷ついていなくても相手がとてもイヤな気持ちになっていることがわかったからです」「いじめはとても相手を傷つけ、最悪、自分まで傷ついてしまうとても悪いものだと思います」「もしいじめを見たら、見て見ぬふりをしないで注意する」と考えていました。

＊

子どもたちにとって、自分の言葉や態度を振り返り、友だちとの関係づくりの大切さを改めて考える時間となりました。

第三中学校　連携行事
～せいなん幼稚園との交流～

せいなん幼稚園と第三中学校は、中学生が幼稚園に職場体験でお世話になったり、中学校の体育祭で一緒に走ったり、避難訓練を一緒に開催したりと、校種をこえた交流や連携行事を大切にしてきました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大により、これらの行事が行えない日々が続いています。なんとかお互いにとって良いつながりを持ち続けたいと、11月に2つの行事を行いました。

一つめは、「泥だんご博士がやって来た！」です。園児たちが夢中になっている泥だんご作り。まんまるでピカピカの泥だんごを作るのは、なかなかコツがいることなのだそうです。泥だんご作りの遊びをさらに発展させるために、土や石などに詳しい理科の中井先生に「泥だんご博士」として来てほしい、という依頼が三中に舞い込みました。土をふりかけたり、表面をこすったり…中井先生にコツをきいたり、おともだちと話をしたりと、やりとりを楽しみながらみんなでピカピカの泥だんごを作ることができたそうです。

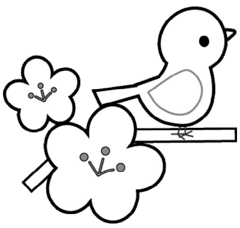
二つめは、演劇部とダンス部のミニ発表会です。事前に、演劇部には「園児たちが楽しんで見られる、親しみやすく、くりかえしの内容のある劇」、ダンス部には「園児たちを圧倒するようなかっこいいダンス」という依頼を幼稚園からいただいていました。生徒たちは園児に楽しんでもらおうと、練習を重ねてきました。

当日は司会や挨拶も生徒が担当しました。演劇部は園児にも親しみ深い「どうぞのいす」を、ダンス部はかっこいいチームダンスをそれぞれ披露しました。発表後、「どうやったらそんなにじょうずにできるの？」「どれくらいれんしゅうしたの？」と園児からたくさんの質問があり、生徒たちははにかみながらそれぞれに答えていました。園長先生から「卒園したあと、みんなみたいにがんばっていろんなことに挑戦できる中学生になってほしいなと改めて思いました」と嬉しいお言葉をいただきました。

三中の生徒たちは「みんな小さくてかわいかった」「一生懸命見てくれたし、たくさん質問してくれてうれしかった」「楽しんでもらえてよかった」と良い笑顔で感想を話していました。こんな時期だからこそ、校種をこえたあたたかい心のつながりの機会を、これからも大事にしていきたいと改めて感じるひとときでした。

生徒たちは、大きく年齢のはなれた園児たちとの交流を通し、相手を意識した言葉遣いや行動の大切さを実感し、他者を尊重する姿勢を学びました。

（第三中学校　益住麻衣）



第4回　イキイキさわやかに学ぶ会

発達障がいのある子どもとのかかわり
～子どもと話そう　子どもに聴こう～

◇令和3年10月26日（火）
◇講師　金　泰子さん　（大阪医科薬科大学病院　小児科）

＊

私が担当する心身症外来には、心や身体の不調、発達障がい、不登校に悩む人たちが来られます。発達障がいのある子どもは通常学級に6.5％（平成24年文科省調査）いるとされ、近年、医療の領域では発達障がいではなく〈神経発達症〉と診断されるようになっています。発達障がいは生まれつきの脳の機能障がいで、通常は低年齢で発症し、〈強い個性〉と言われることもありますが、脳の働き方が違うために日常生活で困ることが多いのです。しかし、本人の特性にあった学び方を見つけ、理解に基づいた環境と必要とされる支援が整えば、日常生活での困難が減り、本人が本来持っている得意な能力を発揮する事ができます。一方で、理解されない状況では不適応を起こすことが少なくありません。

一般的に〈障がい〉は当事者の問題とされ、社会が障がいを作っていることは忘れられがちです。飲料の自動販売機を例に挙げると、お金の投入口や商品の取り出し口が広く・低い位置にあれば、車椅子の人も手助け無しに購入できます。障がいとなる道具や環境を作り出しているのは、障がいの無い人を中心に動いている社会であり、それに気づいていない私たちかもしれないという視点が必要です。

発達障がいのある人の中で、自閉スペクトラム症（ＡＳＤ）の人はこだわりが強くコミュニケーションが苦手なため、わがままで自分勝手、空気が読めないと言われがちです。例えば夏の暑い日、Ａ君が汗をかいているＢ君を見て、涼しくなるようにと考えてホースで水をかける場面を想像してください。Ａ君に悪意はないのですが、驚いたＢ君が逃げていると、大人は「何やってるの！　Ｂ君が嫌がってるじゃない！　意地悪しないで！」とＡ君を叱るでしょう。そんなとき「私にはＢ君は嫌がっているように見えるよ。Ａ君が意地悪しているようにも見えるけど、もしかしてＡ君はＢ君のこと嫌いだった？」と、私が見て感じた様子を穏やかに伝えることが大切です。叱られる理由がわからないまま、一方的に叱られる子は傷つきます。一人遊びする子と話していると、どのように付き合えば良いのか戸惑っているだけで、友だちが欲しくないとは思っていない事がわかります。

子どもたちの成長を見守っていると、注意欠如多動症（ＡＤＨＤ）のある人の〈多動性〉はよりよい環境の中では行動力に、〈不注意〉はひらめきと発見に、〈衝動性〉は決断力・行動力につながる事が少なくありません。こだわりが強い自閉症スペクトラム（ＡＳＤ）のある人はルーティンをきちんとこなす素晴らしい働き手になっています。発達特性は、みんな一緒に、同じやり方で、同じゴールを目指す集団生活の中では短所とされがちですが、特性にあった環境では、長所と言われる事も多いのです。

子どもが自分の特性を知り、自分にあったやり方を見つけて成功体験を重ねると、何事にも意欲的に取り組もうとします。苦手なことにも、です。そのため学校の先生がたには、子どもが他の人と同じようにできるように頑張ることを求めるだけでなく、いま確実にできる力を使って楽しく集団参加できるよう、許容力と包容力を持って接していただきたいのです。

大人は子どものできていないことを見つけて叱りますが、それまでできていなかったことができていても見過ごしがちです。また、『やればできる』と言いますが、果たしてそうでしょうか？　私自身、頑張ってもできないこと・諦めたことはたくさんあります。だからこそ励ますだけでなく、なぜできないのか、できなかったのかを子どもと一緒に考えたいのです。そして、その子なりに頑張って出来たときは、ちゃんと評価したいのです。

診断は必要な治療法や支援を導くためにとても重要ですが、ゴールではありません。理解と支援がスタートする最初の第一歩になります。私が周囲の大人だけでなく、子どもに対しても理解できる言葉で診断や投薬についてわかりやすく説明するのは、子どもが自分の特性を知り、自分に適した環

境を選択できるようになってほしいと願うからです。

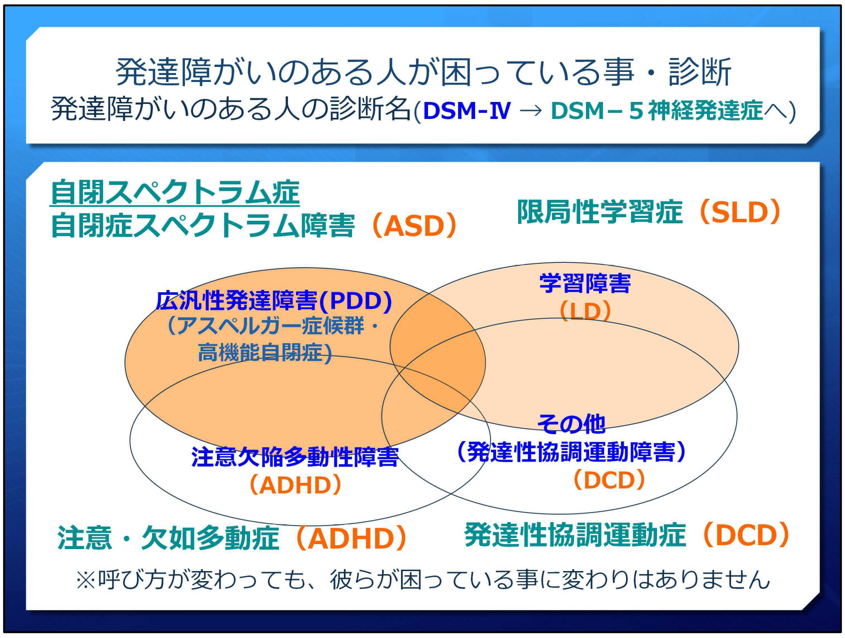
平成28年4月に施行された障害者差別解消法では、障がいを理由とした不当な差別をしてはいけない、また障がい者に対する社会的障壁を除去するために、必要かつ合理的配慮をするよう努めなければならないと定めています。当事者にとってよりよい環境を作るため、必要とされる配慮があれば、医療機関から学校などに申し入れをすることもあります。努力と忍耐によりできないことができるようになることを求めるばかりでなく、できること・得意なことを生かして、子どもたちがのびのび・生き生きと楽しく学び成長して欲しいと願いながら、小児科外来で子どもたちと話し、子どもの声に耳を傾けています。

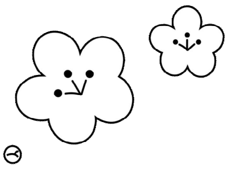
（金　泰子）

＊

参加者からは「人と比べず、その子自身の成長やタイミングに合わせて寄り添いたいなと思いました」「客観的に我が子を見る事で見えなかった事や大事な事が見えてくるかもしれないのではと感じ、実践してみようと思います」「今日からの心の持ち方に気をつけようと思いました。感謝の気持ち、子どもを愛していることを言葉にする大切さ。わかっているようで、日々言葉にできていないないなと痛感しました」など感想が寄せられました。

家庭と地域社会の環境が大切であり、『親が幸せなら子も幸せ』、『振り返ると見守る人の視線がある子どもは真っすぐに育つ』と話される金先生の優しく温かいながらも力強い言葉が心に響いた勉強会でした。





箕面市人権教育推進会議

人権教育推進会議は、有識者や市民、教職員等で構成され、箕面市における人権教育等について検討しており、この情報紙も編集しています。11月に開催した今年度第1回目の会議において、萱野東小学校での支援教育の取り組みについて教職員からの報告を受け、意見交換を行いました。

「萱野東小学校の実践　～自立・自律・繋がる をめざして～」

◇令和３年11月24日（水）
◇講師　萱野東小学校　宗安　愛　教諭

＊

萱野東小学校の支援学級では、「自立・自律・繋がる」をめざして、個々を育てるための取り組みを行っています。

＊「自立」とは、自分でわかったり、自分でできること

＊「自律」とは、我慢をするなど、自分をコントロールすること

＊「繋がる」とは、友だち、地域、教材と繋がること

少しずつできることを増やし、友だちや周りの人との繋がりの中で日々の課題を解決しながら生活できるようにと取り組んでいます。

継続的に取り組んでいる活動のひとつが「ランチタイムトレーニング（ラントレ）」です。ラント

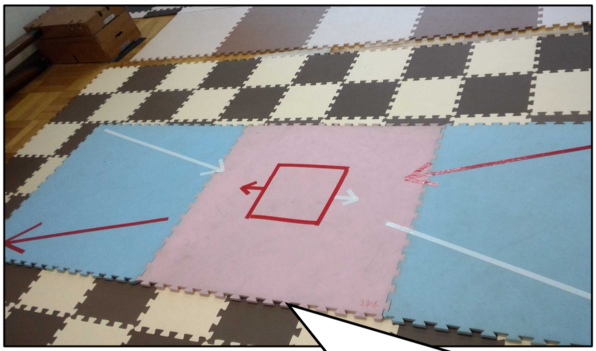
しは、感覚統合遊びからスタートし、今年度で４年目の取り組みです。内容は、運動遊び、テーブルゲーム、言葉遊び、リズム遊び、授業や行事に関連のある動きを取り入れた遊びなどをしています。遊びの中でいろんな動きや刺激を経験することで、複数の感覚を整理したりまとめたりして適切な行動がとれるように促しています。給食の準備時間の15分をつかって、基本的に毎日、学習室（支援学級室）で行い、多くの大人が丁寧に見ることができる体制がとれるよう心がけています。

例えば、風船バレーは、軽い力で飛ぶので、発達段階が様々な子どもたちが一緒に参加できます。風船にふれていない子の名前を呼んで打ち返すことで、ソーシャルスキルも身につきます。カルタは、目のトレーニングになるとともに、ことわざや都道府県など色々な種類があるので、次に取り組む学習内容を先取りすることができます。絵札を複数用意し、取る機会を増やす工夫もしています。その他、大縄跳びや的あて、けんけんぱなどもメニューにあり、ラントレは、新しいものをどんどん取り入れながら、たくさんの取り組みを行っています。

ラントレを継続的に行うことで、技術やコツの習得だけでなく、順番を待ったり、指示を最後まで聞いたり、他の人のことを考えたりなど、着実に力がついていく手応えを感じています。小集団で実施するため、できた瞬間を教員は見逃さずに褒めることができるので、子どもは成功体験を重ねていくことができます。失敗してしまう場面を他の人に見られることに抵抗を感じる子も、安心して失敗できる場になっています。また、スキルアップしていくことが自信となり、クラスでもやってみようかなという意欲にも繋がっています。ラントレに来ると子ども同士も仲良くなり、控えめだった子が積極的に話せるようにもなっています。

教員同士も内容について話をしたり、一緒に教材の検討や作成をしたりして、学年を超えてつながりが強くなっています。コロナ禍で制限はありますが、今後も可能な形でラントレを継続しながら、子どもたちの「自立、自律、繋がる」力を育んでいきたいと思います。

大縄跳び補助シート



縄に入る位置、跳ぶ位置、抜ける位置をテープで表示し、タイミングをはかりやすくする工夫をしています。

ラントレは、子どもたちが安心できる雰囲気の中で、楽しみながら少しずつ着実に力をつけていく効果的な取り組みだと思いました。また、この経験が自信となって、クラスでの関係づくりにおいても大切な役割を果たしていると感じました。

学校図書館司書コーナー
「心を育む、図書の時間の読み語り」

「今日、なんの本読むの？」子どもたちは、図書の時間の読み語り（※）を、いつも楽しみにしています。コロナ禍なので、今は司書が児童の方を向いて直接本を見せて読むのではなく、教室や図書館で距離を取り、実物投影機を使って電子黒板に映して読んでいるのですが、本の表紙が映ったとたんに「よし！」とか「やった！」とか歓声があがります。本を読みはじめると、子どもたちはすぐに集中し、おはなしの世界に入ります。いつも一緒にいるクラスのみんなの前なので、反応も感情も素直に出せます。笑顔であったり、突っ込んだり、思わず主人公を心配して声が出てしまうこともあります。おはなしが大好きなのがよくわかります。コロナ禍で、心に不安を持っている子も多いと思います。読む本は、子どもたちの状況を見て変更することや、複数用意して「どちらがいい？」と子どもたちに選んでもらうこともあります。

今回ご紹介するのは、『お月さんのシャーベット』です。心にぽっとあかりが灯るような、優しい絵本

を選びました。著者は韓国の絵本作家ペク・ヒナさんで、令和２年（２０２０年）アストリッド・リンドグレーン記念文学賞を受賞されています。

この絵本は、寝苦しい真夏の夜に起きたできごとを、紙で作った人形とミニチュア模型であらわし、長谷川義史さんが大阪弁で訳をつけています。「あれまあ　えらいこっちゃ。お月さん　とけてはるがな」あまりの暑さにお月さんがとけて、それをたらいにうけたおばあちゃんがシャーベットにし、みんなにわけてあげるといった発想のおもしろさと大阪弁に、子どもたちはひきつけられます。また、夜の暗闇にお月さんのあかりのあたたかさを感じ、安心します。子どもたちは、過去に読んでもらった本も、内容も、よく覚えています。読み語りの絵本の言葉や情景が、子どもたちの心になにか響くものであるように、司書は今日も本を読み語ります。

（萱野北小学校司書　坪田典子）

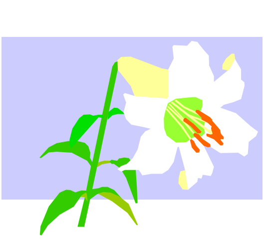
（※）箕面市の小中学校では、「読み聞かせ」ではなく「読み語り」という言葉を使っています。また「図書の時間」は学級の取り組みであり、読み語りの他に調べ学習・ブックトーク、授業の連携の本の紹介などをすることもあります。

『お月さんのシャーベット』
ペク・ヒナ／作
長谷川義史／訳
ブロンズ新社　２０２１年

☆編集後記☆

新型コロナウイルス感染症は、私たちの日常生活を大きく変容させましたが、日々、感染対策に取り組みながら、私たちは日常生活を取り戻してきました。学校園では、今年度は１年ぶりに元パラリンピック代表のかたを講師に迎えての「あすチャレ！スクール」が実施されたり、中学校と幼稚園で交流が行われたり、出会いから学ぶ機会を楽しむことができました。

新しい生活様式の中で、「今、できること」を考え、日々のくらしを紡いでいきましょう。



「はじけるこころ vol.52」はいかがでしたか？

みなさんのご意見・ご感想をお聞かせください。下記の①～④の内容を、郵送、ファクスまたはＥメールにてお送りください。これからも人権教育に関心をもっていただける記事を掲載したいと思っておりますので、ぜひともお言葉をいただけることを編集委員一同お待ちしております。

記

①ご意見・ご感想、②お名前（無記名でも構いません）、③「はじけるこころ」の入手方法、
④（「はじけるこころ」に掲載する場合がありますので）ご意見・ご感想掲載の可否について

〒562-0015　箕面市稲 1-14-5　箕面市教育委員会人権施策室
FAX ： ０７２－７２５－８３６０
Email ： edujinken@maple.city.minoh.lg.jp